４班　確かな学力の向上、技芸を磨く実学の奨励

課題	県が何をする	誰が	何をする	誰が	何をする
多様な力を持つ人材育成が必要					
社会変化に対応できる人材育成	教育現場で「師」対「生徒」ではなく、生徒同士の話し合いの場を増やす。（授業形態） 常に社会情勢の動きをみなで共有する。「世の中」と捉え方、「自分たちの世の中」と捉えるようにする。	市町 学校	常に社会情勢の動きをみなで共有する。「世の中」の捉え方、「自分たちの世の中」と捉えるようにする。		
多様な力の育成	ディベートする力を身に付けさせる。専門分野の講師を招いて実践教育。ディベートは、立場を入れ替えても成立するもの。立場が入れ替わったときに相手の立場が理解できる。論理的な思考と会話術が育成される。				
社会に対応できる力の育成	客観的に議論できる人材の育成。（議論の質を育てる教育が必要）				
	子供が問題発見力を磨ける探求の場を提供する。一歩を踏み出させてあげる。	市町	地域の人たちと子供達が接する機会を作る。イベント開催など。自然とコミュニケーション能力がつくとともに地域間の関係が良くなる。活気付く。		
	事例を出して、学校等に連携する。	企業	新聞社、放送局などに訪問してもらう。		
	教委自身もどのように社会情勢が変化しているのか、体験する機会を多くの教員に設ける。	市町	機会の継続が図れるようパイプシステムを確立する。		
社会変化に対応できる自立の育成	旗を振る。（金、場、時間、情報を提供する）	教委	ディベート、プレゼンテーションを主眼にした授業（知育・座学）にしてみては。		
社会変化に対応できる自立した人材の育成	教育委員会がその方針をしっかり明確に打ち出す。	学校	ディスカッションやプレゼンの授業を楽しみながらできるプランを考える。	市町 ＮＰＯ 専門家	子供たちにノウハウを伝え実施する。
社会の変化に対応できる人材の育成	教員のコミュニケーション能力（生徒、家庭、社会）を高めないと、３５人学級の意味がなくなる。	学校	社会の変化（外部の変化）自らの変化）に対応できる人の育成。（多様な力の育成、コミュニケーション力、問題の発見力）		
話す力、聞く力、対論する力、場合によっては主張する力を育成する	育成する指導者を養成する。				
社会に対応できる力の育成コミュニケーションの育成	国語教師の再教育。（教科書の音読、話す力の指導）	市町	市町の学校教育課は県教委の指導をより具体的に各学校に指導。小中学生で教科書を音読できない子供達が多い。これはメールのやり取りで声を出して話すことが減ったからだと思う。		
教育における重点化のシフト	課題設定力、想像力など学力の３要素では伝えきれていないと考えられる「学力」について、市教委や教員と認識を統一する。また、県民の考える「学力」で培われる力について、現在の教育でマッチングしている部分については、好事例の紹介などを通じていっそう推進する。	教委 教員	独創的魅力的な授業や取り組みについては、県へ共有する。		
	先生が相談にのってくれるかなどのアンケートなどを子供にとって、まとめて学校に活気をつける。	学校	子供と向き合う時間を増やす。		
社会に対応できる力の育成	一般企業からの情報入手、教育へのフィードバック。（求められる人材像、新入社員の傾向等）				

４班　確かな学力の向上、技芸を磨く実学の奨励

課題	県が何をする	誰が	何をする	誰が	何をする
社会に対応できる力の育成	学校間、学校、地域社会間での交流の機会の提供。	学校 地域 企業	学生が主体的に学ぶ、問題を見つけ出す練習の場。		
社会に対応できる力、多様な力の育成のために、社会や他社を受け入れ自分の力に変えていくことができる。	社会情勢の変化をタイムリーに把握し周知する。俯瞰的に見て、学校教育の大枠を捉えてマネジメントしていく。←ある程度自由に教育を行えるようにしたうえで学校教育。多様な意見、生活など役に立つ・立たないなど、すぐに結論を出さずに、広く見聞を深める方法、学習の仕方、インプットアウトプットを意識。	家庭 個人	失敗を恐れず興味関心のあることは探求できる環境。家庭内や友人などと「意見を聞く、話す」経験継続する。		
社会に対応できる力	学習での要望が学校に集中してしまうところを色々なサポートして（財政面など）その地域の人たちにもサポートを呼び掛けていくこと。	学校	授業の中でも、先生が一方的に話すのではなく、対話的授業、議論的授業を行う。	個人	相手の話を聞いて取り入れる、自分の意見を述べる、相手との会話、議論を積極的に行っていく。
一人の人間に学校が関心興味を持たせられることに出会わせる	-	地域	色々地域住民のお話を聞く時間があると良い。		
社会に対応できる力の育成	-	地域	子供の頃からの地域の行事への参加（防災、体育祭、お祭り、文化祭等）。職場体験、見学、子供のボランティア活動。		
コミュニケーション力の向上	-	地域	小集団でいいので、地域の人と話をできる場を作る。		
文化芸術教育等の推進					
文化芸術体験の機会の少なさ	ＳＰＡＣなどの文化施設との共同企画を行い、まずは、小中学生へ体験の場を提供する。県芸術体験のフィードバックを行う。事前、事後で２度意識調査を行う。統計を取り、どれだけ関心があるのか、その効果はどれほどか、把握できるようにする。	学校	自分の住む地域について、まずは知ろうとする。そういった市政を生徒たちが学べるようにする。（フィールドワークを増やす）		
文化芸術教育の活発化	学校とその人を橋渡しする。スポーツの人材バンクだけでなく、文化芸術でも作る。技芸を磨く実学という点で、実学が「食べていける」ことを目標とするならば、実際にそれを職業としている人を学校に招いて話を聞く機会を増やす。				
文化芸術教育	芸術と文化について市町などから発信する。				
	静岡県下で活躍している団体をきちんと整理して登録する。県と各団体との連絡を取る。	学校	県内での団体の活用で経費の節減を図る。		
	才能ある人材を見つけたとき、その人材を育てるためのロードマップ等を整備し一般公開する。				
	-	地域	地域で活動しているクラブとの連携。	学校	文化芸術部の教育、学校への訪問。
文化芸術教育、時代を先取りした教育に関して、指導者の選定について	文化芸術に体感することによって、興味を持たせる、面白さを感じてもらう場を多くしていく施策を検討。文化芸術を活かして、実学に結び付けていくということは、文化芸術により生計を保とうとすることが目的なのか。文化芸術により多く触れ合う機会を多く持つことが重要。				
時代を先取りした教育（ICT）	ICTの施策についてもっと前倒して進める。また、将来必要になるプログラミングの学習についても、県として施策に入れて推進する。				
時代の変化に対応した教育	ＩＣＴの活用を促すことで、新たな教育方法を展開し学力アップに繋げる。				
時代の変化等を踏まえた多様な教育（文化芸術ICT）	旗振り。（芸術鑑賞、ICT推進（前倒しで進める）	地域	地域文化の発掘調査。		

４班　確かな学力の向上、技芸を磨く実学の奨励

課題	県が何をする	誰が	何をする	誰が	何をする
時代の変化等を踏まえた多様な教育	財政面での援助を考える。	学校	学校でも美術館に行ったり、演劇教室を行うようにする。	個人	芸術や文化などの経験を増やす。その経験に興味を持つ。
時代を先取りした教育	-	民間	自動車の自動化に伴った免許制度。これからの自動車学校の指導の仕方。		
教員の子供と向き合う時間の確保					
教育現場の負担軽減	地域人材の認定制度の導入。（保有している知識や経験等を客観的に評価。人生１００年時代においても大きなメリット（第２の人生））				
	プロジェクト事業等をする際は、教育現場が構えすぎないよう、資料や結果報告書等の見栄えにこだわらず内容重視の評価にする。	市町	教育現場サポート。（相談しやすい雰囲気作り）		
	教職員の仕事を見直し、残すものを最小限にして身を軽くさせること。	教員	要領よく段取りよく効率よく仕事をすること。		
教員が窮屈	教委のあり方について再検討する。	市町	現状の課題に応じて、教育のあり方を考え実践していく。		
教育現場の負のスパイラル、先生の多忙の解消は可能か	教師の通常業務の見直しを進め、無駄と思えるようなことまでも縛るのではないように検討していただきたい。				
教育現場における教員の多忙化	一般の教育関連団体との連携を強化し、教育の形態を多様化する。（横のつながり）	地域	小中学校で学習支援を行う。（放課後）地域住民と大学が共同で。		
指導体制の改善	教員の仕事について、明確にして業務の低減をする。できれば、教員を増やす。				
	負担軽減に必要なコスト負担、教員の業務負担の軽減、外注化。				
	県民の声を聞いて、どういう施策をするか伝える。	学校	自分のことを知るための学習、機会を計画する。（子供などに）		
指導施策	現状の認識（問題は何か、要員、目指す姿との差）とそこからの指導者（教員）の育成への反映。	教員	教育において、重点は何かを見据えた上で、研修等を通じて指導者育成を行う。		
指導者の育成	教員を「教育のプロ」として本来の教師とは何かという視点に戻って導いてほしい。				
教科以外も指導していける教員の育成	教科以外にも人生を豊かにする、深める余暇などの時間を作る。	国や県	副業を含む教員の職業や自身の生活に対する多様性を認める。	学校	教員も含め、自らの軸を持つ。またそれを児童生徒らに話す時間を持つ。
「静岡愛」を育む					
地域の文化を知り、自分自身を見つめなおす	地域の文化的活動への参加を促す。	地域	地域の文化的活動の紹介。	個人	地域の活動や風土を学び、歴史や人生、自分自身について学びを深める。
地域社会の和を大切にする活動	市町への働きかけ。	市町	上からの諸問題はスムーズに行くが、地域活動及び横のつながりは、必要がなくなってきている。実態はどうなっているか調べてほしい。昔は、子供でも、近所の人々の名前はほとんど知っていた。大きな災害があった場合、近くの人々の助け合いは期待できない。		
地域との連携	会社、企業等に協力してもらう。	企業	地域のクラブ活動との連携。		
	地域についての教育を少しだけでも取り入れる。地域愛着の育成。若いうちから地域教育。地域住民の方々にお話をしていただく機会を作る。地元企業の工場見学。	学校	地域についての教育を少しだけでも取り入れる。地域愛着の育成。若いうちから地域教育。地域住民の方々にお話をしていただく機会を作る。地元企業の工場見学。		

４班　確かな学力の向上、技芸を磨く実学の奨励

課題	県が何をする	誰が	何をする	誰が	何をする
地域との連携	教育現場の需要と地域住民の供給との間に何が問題となっているか明確化する。明確化された問題、課題に対して施策としてほしい。				
	学校が頼みたいことを頼めること、地域の人がやりたいことがやれることを調整する窓口機能。				
	はじめの一歩を促す仕組みづくり。学校、企業、自治体、行政の連携がスムーズに行われるよう協力体制が取れる仕組みづくり。				
	施策に掲げている目標などを市町や地域と共通認識させる。	地域	できることをしてもらう。（挨拶活動など少しずつ）		
	外部人材の確保による教員の負担軽減を図り、子供と向き合う時間の確保。（子供の抱える色々な問題の解決）人材確保の問題。	学校 地域	子供に、地域行事に参加させ、地域との関係を持たせる。それには、学校、地域、子供全体で取り組むことで社会の一員である自覚を持たせる。		
学校教育における地域人材の活用	マッチング方法を考える（学校側の需要を取り集め提示する、探すなど。就職支援のスキームが利用できるのでは。外部人材について「有償」での利用も考慮する。	市町	県より地縁的な取組を行う。（見守り、行事活動など）		
	旗を振る。（金、場、時間、情報を提供する）	地域	地域と教育。（学校又は教委）の連携（選任）部門を作ってみては。		
その他					
実学教育システムを構築する上で、連携先の選択は個別企業や団体に偏る可能性がある	ネットワーク、コーディネート役をとりまとめる。浜松市教育委員会学校地域連携担当課では約１６０種類の講座支援登録がされているとのこと。学校あるいは、教師はそのサイトを活用すれば手続きが簡単にできる。2018.8.7日本経済新聞参照				
教育をしていく上で、低年齢での取りこぼし生徒をなくす	極力、提出資料及び会議を少なくする。	学校	精神的なゆとりのある時間の作成。		
学校をみんなの居場所にする	過疎、少子化によりできた空き教室の活用のハードルを下げる（公民館などの会議室貸し出しくらいのハードル）。地域人材（サポーター）と学校のマッチングコーディネーターなどの養成。	地域 ＮＰＯ 個人	子育てサロンや寄り合いどころ、料理教室など講座、放課後児童クラブなどで空き教室を活用する。無償（有償）ボランティアで事務作業や実学教育、校内の見守りなどを行う。クラスサポーター（担任以外で副担や級外などの立場のようなもので、HRや困りごとの相談役）を作り先生以外の目と風を学校内に入れていく。		
本日の施策レビューの内容を整理し実践できることを実践し公表していく	本日の内容の整理、実践に結びつける。				
防災訓練へ学生を参加させる場合	学生を参加させるなら、テスト１週間前に防災訓練は行わないようにするなど、教育現場の把握に努める。				
人間の頭の回転の悪い人は、今の現状を表している	-		「人間性を目覚めよ」という世界に合わせるだけの人になるな。内側の世界を気づいていかなければ。ヨーガによって精神力を付けさせよ。		
４班のテーマ全般	教育現場が抱えている課題を今回の議論も踏まえて深堀すべき。				
-	文武芸三道鼎立の前にマナーや基本動作の啓発、継続して実行する。				
-	加藤さんが言葉にしたことがすべてだと思う。				